

飛耳長目

情報収集や観察に優れ、ものごとに精通していることの例えとして使われる言葉で、書物を指すこともあります。この言葉を大切にした歴史上の人物に吉田松陰がいます。彼が長州（現在の山口県萩市）に開いた松下村塾の塾生には、幕末に活躍した高杉晋作や久坂玄瑞のほか、明治という新しい時代を拓いていった伊藤博文や山形有朋がいます。松陰は塾生に「流れが速くなった時代に正確な判断を下すため、常に情報を収集し物事を鋭敏に観察すること」を説きました。鎖国中ではありましたが、薩摩藩（現在の鹿児島県）や長州藩などの革新的な藩は、諸外国の動静や江戸での出来事などの情報を独自のネットワークで集めていました。

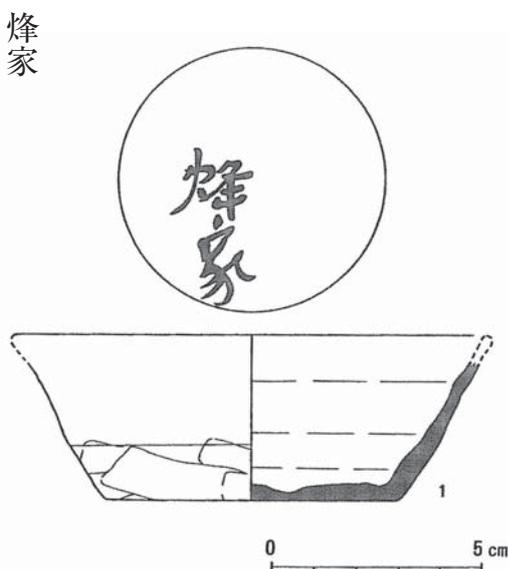
少し唐突ですが、一三〇〇年前の律令時代はどうだったのでしょうか。この時代、国内外のすべての情報が集められたのは平城・平安京（宮です）。国外の情報は遣唐使により、現在の外務省的機能を有していた大宰府（福岡県）を経由して伝えられました。また、東北の情報は多賀城（宮城県）に集められました。八世紀前半頃には東山・東海・北陸・山陽・山陰・西海・南海道など七つの全国道路網が整備されます。これらの道路には三〇里（約一六キロメートル）毎に駅家が設置され、東山道の各駅には一〇疋の馬が配置

されました。馬を乗り継ぎ郡衙や国府に情報が集められ、さらに平城京や平安京まで数日掛って情報が届けられました。

日本の古代において、宝龜五年（七七四）から弘仁二年（八一二）、蝦夷に対して朝廷が行った征討を三十八年戦争と呼びます。この間、玉造柵・色麻柵・新田柵・牡鹿柵（いずれも宮城県内）や胆沢城（岩手県奥州市）・志波城（盛岡市）・徳丹城（紫波郡矢巾町）などの城柵に二十万人以上の人員が前線に送り込まれたと考えられています。これらの人員や物資の運搬にも東山道などの主要道路網が使われました。国分寺中学校の南西部の住宅地には発掘調査で発見された東山道跡が久保公園として保存されています。道路の幅が約十二メートルで、両側に幅と深さが一メートルの側溝を持つ広い道路です。坂上田村麻呂などの征夷大將軍や東国各地から集められた兵士が往來したのでしょう。県内では、この他の古代の通信手段も発見されています。国指定史跡飛山城跡（宇都宮市竹下町）です。城そのものは鎌倉時代後期の宇都宮氏に関する城館ですが、発掘調査で城跡の下層から九世紀後半の竪穴建物が発見されました。そこからは「烽火」と記された墨書土器が出土しました。ここに烽火台があったと考えられます。朝廷側に危機が迫ると烽火が

下野市教育委員会 生涯学習文化課

上がったのかもしれない。九州から瀬戸内海を経由して大阪・奈良付近にも烽火台を伴う防衛拠点があり、対外政策の危機の際にも烽火があげられたのでしょう。烽火は狼煙とも書きます。煙や炎を通信手段にした訳ですが、良い煙を出すために乾燥させた狼の糞を混ぜたことが記されています。まさに古代における光通信です。



烽火

報告書より転載

中国の春秋時代、斉の管仲（前645、法家の祖）が、「遠くのことをよく聞き知ることのできる耳と、遠くのことをよく見ることのできる目を持つ、耳を飛ばし、目を長くする」という意味から転じて「飛耳長目」といいました。